2014年度入学試験問題

国　　語

（試験時間　15：00～16：00　60分）

1．解答用紙は，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。

2．解答は，必ず解答欄に記入してください。なお，解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。

3．解答は，HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また，折りまげたり，汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。

4．解答用紙には，受験番号と氏名を必ず記入してください。

5．マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないよう特に注意してください。

121－JQ

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（50点）

道具や建築などは太古から現在まで熄むことなくつくられてきているが、それらがすべて今日私たちが理解している意味でのデザインなのではない。デザインは産業社会になってからの、ひろい意味での物の制作や環境の形成についての実践である。デザインがそれまでの物の制作と著しく異なっているのは、以前には殆ど自明のように道具に含まれていた機能を意識されたデザインの論理としてとりだしたことである。つまり産業社会、とくに二十世紀に発生した機能主義デザインとは現実の文化をうけとることからはじまるのではなく、十八世紀末の産業革命以来の生産主義に方向づけられながら、世界を認識し、あるいはもっと実践的に世界のあるべき姿を示すものとしてあらわれてきた知的な活動のひとつのタイプであった。生産主義がこの時代の知的産物に殆ど〔1〕ア・プリオリに滲みこんでいるのは、生産者であるブルジョワジーが、十八世紀以前の非生産者であった貴族階級の支配にとってかわった資本主義社会の知的慣習になっていることであり、デザインはブルジョワジーの、したがって資本主義の社会と切りはなしては考えられない思考に基づいている。このような意味でのデザインが機能主義を軸にしてあらわれるようになった経緯を顧みておく必要があろう。

十八世紀及びそれ以前にも、建築はもちろん、衣裳、家具、食器その他の小物などが念入りに製作されていたし、その意匠が流行になることも少なくはなかった。しかし産業革命の進む十八世紀末をさかいに物の生産、消費の両面にわたって大きな変化が起った。ひとつはこれまで家内工業的職人あるいはもっと進んでマニュファクチュアによって生産されていた物が、機械を備えた工場によって生産され、大量の生産物が市場に出るようになった。やがてこの生産者、つまりブルジョワジーが社会を支配するようになる。一方、消費における著しい特徴は、消費階層として大衆（といっても長らくブルジョワジーとプチ・ブルジョワジーにとどまっていた）が登場してきたことである。生産様式の変化はさまざまな結果をもたらした。たとえば機械製品における「美」の問題が生産側の課題になりはじめたが、実際、新しい材料（たとえば鉄）にどんな形態をあたえればいいかなどは充分生産者を当惑させていた。放置しておけば職人の手になるかつての「工芸」の美は失われてしまう。機械工業の製品におけ

る美の問題の緊急性は、十九世紀の前半に、ヨーロッパの工業化しつつある諸国でインダストリアル・デザインの協会があいついで結成されている事実からも理解できる。しかしそのとき以来、工業製品ないしは工業製品を素材に使う建築についての美学はながいあいだ適切な答えをもたないできた。それはとりあえず美術を応用すること、デザイン教育のためには美術館が必要だという方向を辿った。デザインとは美術の諸原理を実用品に適用する応用美術だと考えられた。だが、解答はすでに芸術家でない技術家からあらわれていた。その代表的な例がジョゼフ・パクストン（1801-65）によるロンドンのクリスタル・パレスであることはいうまでもなかろう。パクストンは工場生産された部品を組み立てて巨大な建造物をつくる。それは産業社会の生産力を対象化し、物を生産技術のシステムに同化し、そこから形成し、かつ物を完全に目的に適用させる合理性に基づいていた。そこにはいままでの建築にはなかったある新しい環境がはじまっていた。だがこの技術的合理性に基づく美学は、合理主義者からみるともどかしいほどゆっくりとしか発展しなかったが、それはブルジョワジーが、その生産主義とは裏腹に、「物」をはるかにコノタティヴな意味において存在させようと欲していたからである。建築においても工業製品においても、技術的・機能的要請と歴史的装飾様式の折衷[2]が十九世紀中を支配するようになる。この状態はのちの近代デザインのヨウゴ[3]者であった歴史家たちによって一様に非難されたし、デザインが独自の思想と表現形式を見出すまでの［(4)］的な段階と考えられがちであったが、その判断自体、すでに生産主義的な思考であり、「物」が制作者によってその時代の生産力に同化されるべきだという暗黙の前提――近代デザインの思想――をおいていることを意味する。だが「物」はそのように機能主義、生産主義の観点から織りあげられているものではない。だからかりにグロテスクな折衷であろうと、進歩主義的にのみ考えられた「物」の理想化よりはるかに正当な「文化」の現実態であったのである。パクストンや多くの技術者たちの仕事はデザイン（近代デザイン）がやがてひとつの思想としてあらわれてくる祖型であったが、文化とはこれらの混然とした共存によって表現されていたのである。

もうひとつの源泉は、一見パラドクシカルなウイリアム・モリス（1834-96）とアート・アンド・クラフト運動にある。これもすでに通念化していることだが、[5]ここでのコンテキストにそってもう一度、解釈し直しておくべきであろう。モリスの考え方はさきにあげた応用美術に似ているが、その差異を見分けておくべきものである。またモリスがラダイット的傾向をもったのは、

資本主義による職人のプロレタリアート化に対して民衆的な社会主義的理想をもっていたからである。だがモリスがデザインの思想のセンク[6]であるとすれば、アカデミックな芸術のなかに（生活を離れた）芸術の終焉を見ていたからであり、日常的・精神的生活を支える「物」――道具や建築から印刷物、壁紙まで――に、芸術のあるべき姿を見出そうとしていたからであろう。かつてはそうだったではないか。芸術と工芸は分化しなかったではないか。考えようによってはこれはすべての「物」が商品化し、それによって人間そのものが「商品」化しはじめていた十九世紀半ばに、それに対する知的な批判（それはボードレールにおいて最も鮮烈な様相をとるが）のひとつの側面であった。結果として商品のなかに芸術の再生をはかることであり、デザインという産業社会の「芸術」の反語的な祖型[7]になっていたのである。

こうして十九世紀はのちのデザインの思想の萌芽をうみだしているが、すでに触れたように十九世紀は全体として曖昧で、折衷的で、それだけに多義的な文化を手ばなしてはいなかったのである。大衆消費から生じてきたキッチュをひとつの極とし、パクストンからエッフェルにいたる技術的合理主義をもうひとつの極として、物はそのあいだにひろく拡散していた。だが世紀末になると、すでに資本主義がやや屈折した形態、つまりレセ・フェールから制限された方向にむかうにつれて、いわゆる自由主義的ブルジョワジーの幸福な折衷主義、歴史的な文化主義が崩れはじめ、その危機的な意識から、歴史主義を削り落としたアール・ヌーボー、ユーゲント・シュティル、またウィーンの分離派が登場してきて、近代社会そのものがもはや過去をモデルにできない文化をもつことについて自覚し、新しい環境を生成する方法が次第に姿をあらわしてくるようになった。明らかにまだ機能主義ではなかったが、新しい時代の意味、この時代はかつての時代ではないという認識が装飾法を通して視覚化しはじめていたのである。「物」を完全に生産主義的にとらえるというより、近代生活のスタイルというコノタティヴな意味を直接、形象化することが全体を支配していた。とくにヨーゼフ・ホフマン（1870-1956）のウィーン工房に典型的にあらわれていた。近代デザインの思想が姿をあらわすのは、ワルター・グロピウス（1883-1969）を中心とするバウハウスが静かな古都ワイマールにつくられたときである。

バウハウスによって物を制作しかたちづくるだけでなく、はじめて物を社会的に位置づけ、さらにそこから世界全体を描き直

すデザインの思想が、機能主義を基盤に形成されるようになる。それ以前はいかに近代の産業社会がさまざまな「知」を生産中心主義のもとで成立させていようと、文化は消費／交換という軸の上に惰性的に位置づいていたのに対し、それ以後は、いかに近代社会の矛盾が問題になろうと惰性的に生産／流通的な思考が合理的なものであるという考え方がつづいていくようになる。つまりこのふたつはいわば十九世紀以後の「知」を特徴づけるふたつのタイプであり、たんに「物」のかたちの特徴を意味するにはとどまらない。十九世紀中を通じてまだ混在して文化のジッソウ[8]を形成していたこのふたつの「知」の分離を、「物」を介して徹底して進めたのが、バウハウスではあった。

しかし、一方、バウハウスやル・コルビュジェ（1887-1965）など近代建築家やデザイナーを機能主義や合理主義に［(9)］できないという考え方は第二次大戦後まもなくコリン・ロウによって示されて以来、近年とみに多くなってきた。これは現在の「知」の様相がすでに変化し、そこからバウハウスを含め、建築や「物」のあり方を解釈し直しはじめた必然的な結果である。いまでは、グロピウスあるいはル・コルビュジェの新しい読み方、フォルマリスムやマニエリスムとの関連において見る読み方がもはや特殊な解釈ではないことは確かである。だがそれでもなお、バウハウスやル・コルビュジェが、産業社会という技術の変革による社会的構造の変化を機能主義として主題化したこと、少なくともそれをイデオロギー化したという事実は変わらないのである。したがって産業社会が形成した思想としてデザインを考えるなら、バウハウスおよびその後継者たちを機能主義、合理主義においてとらえることはイゼン[10]として正しいのである。

ふつう機能主義といわれているものは目的に対する適合性にプライオリティを与える考え方である。したがって道具の役割はなによりも合目的的に働くことであり、そのためには構成は恣意的（しい）、［(11)］的なものではありえず、あらかじめ計画されなければならず、無駄なく、余計なものを排除し、それぞれの要素のあいだは必要な関係で結ばれたシステムでなければならない（デザインという言葉には計画と意匠というふたつの意味が含まれている。各国語がアングロ・サクソンのデザインをそのまま使っているのはこの二重性にふさわしい各国語がなかったからである）。かくて物は一種の計算された「機械」になる。ル・コルビュジェが「家は住むための機械だ」と考えるのは、このためである。またそこからの結果として余分なものである装飾を排

除し、要求されている諸条件を分析して、機能をひきだしていかねばならない。機能は実体から解放され、機能相互のあいだの関係によって体系化される。このような機能の考え方は早くも十八世紀の生物学にあらわれ、生物はもはや形態からではなく機能から分類されるようになる。同様にデザインにおいては人間の活動を中心とする世界を機能的に分析する。世界は機能素の集合あるいはそれらの関連する体系として把握される。しかもデザイン(12)における機能主義は、このように実体から分離された機能の体系を形態によって分節し、かつ形態に統合する操作としてあらわれる。機能主義を目ざした先行者たちのデザイン論は、この形態と機能の関係をいいあらわそうとするアフォリズムを生みだしてきた。ルイス・サリヴァン（1856-1924）の「形態は機能にしたがう」がその典型的な表現である。だがそれは、形態と機能というふたつの体系を結びつけることであり、その適合が適切であるかどうかと見わける感性の論理が機能の美学にほかならないことを示していたのである。いいかえるならば、機能主義は現実に物に対して人びとが抱く非合理な感情や欲望とかかわりなく、機能素を有意な標識とする記号の体系として世界を考えることであり、しかもこのようにして作られた物を使うことが人間にとって真実と幸福をもたらすと考えられるようになる。商品の交換価値を使用価値へ転換し、またその逆の変換によって、経済的な過程としての生産と消費が形成されているが、この消費はあくまで生産的な消費であり、この過程をふまえて、「物」は生産を中心として仕立てられているわけである。「物」の (13) はそのことを示すのであり、それは早くから部品の標準化、互換性が重要な課題になって登場していたことからも窺える。極端に図式化していえば、充分な種類の部品が社会的に生産され、その組み合わせによってある道具的構成物ができるが、それが社会的に要素化された機能のいくつかの組み合わせと関係づけられるということになろう。

（多木浩二「デザイン」〔今道友信編集『講座　美学4』〕による）

注　ア・プリオリ……先天的。　コノタティヴ……含意的。　アート・アンド・クラフト運動……十九世紀後半の英国の美術工芸運動。機械による大量生産に対して職人の手仕事による生産の中に美を追求することを唱えた。
ラダイット……手工業者たちによる機械打ち壊し運動。　レセ・フェール……自由放任主義。

アール・ヌーボー、ユーゲント・シュティル、またウィーンの分離派……十九世紀末のフランスとドイツ語圏における美術様式の傾向。

〔問一〕 傍線(3)(6)(8)(10)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕 傍線(1)(2)の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

〔問三〕 空欄(4)(9)(11)に入れるのにもっとも適当なものをそれぞれA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

(4) A 継続　B 変則　C 遡及（そきゅう）　D 意識　E 過渡

(9) A 変成　B 解体　C 還元　D 分解　E 昇華

(11) A 即興　B 作為　C 意図　D 触発　E 意志

〔問四〕 傍線(5)「ここでのコンテキスト」とあるが、どのようなコンテキストか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A デザインは美術の諸原理を実用品に適用する応用美術だ、と考えられるに至った歴史を俯瞰（ふかん）するというコンテキスト。

B 自明のように道具に含まれていた機能が意識的なデザインの論理としてとりだされた理由を探るというコンテキスト。

C 資本主義社会の知的慣習となった生産主義と、技術的合理性に基づく美学の間の連関を分析するというコンテキスト。

D 物の制作や環境の形成についての実践としてのデザインがあらわれてきた経緯を明らかにするというコンテキスト。

E 十九世紀に生産者の緊急課題となった機械製品の美の問題に技術者たちが与えた解答を検証するというコンテキスト。

〔問五〕 傍線(7)「反語的な祖型」とあるが、なぜ反語的なのか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A モリスの思想や運動は、社会主義的理想を掲げていたのに、次第に資本主義的な生産物である商品に芸術のあるべき姿を見出そうとするようになったから。

B モリスの思想や運動は、職人の手による工芸のなかに芸術の理想の姿を見ていたのに、機械工業製品のなかに芸術の再生を求めるようになったから。

C モリスの思想や運動は、機能主義や生産主義を否定していたのに、商品の機能を高めることによってその商品を芸術化しようとするものになったから。

D モリスの思想や運動は、機能主義的様式と歴史的装飾様式が混在した文化を受け継いでいたのに、図らずも、そうした文化を崩壊させることになったから。

E モリスの思想や運動は、産業社会における「物」の商品化を批判するものだったのに、結果的には、商品のなかに芸術の再生をはかることになったから。

〔問六〕 傍線(12)「デザインにおける機能主義」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 世界を相互連関する機能素の体系として把握し、機能に従って形態を作り出すべきであるとする考え。

B 目的に対する適合性にプライオリティを与えて、道具をより社会に貢献するものにしようとする考え。

C 余分なものである装飾を排除し、機能的に要求された諸条件に従って世界を形態的に分類する考え。

D 形態に従って合目的的に分類された「物」から、その機能素を引き出すべきであるとする考え。

E 機能の体系を形態によって分節し、かつ形態に統合する操作によって機能を実体から解放する考え。

〔問七〕 空欄(13)に入れるのにもっとも適当な語句を左の中から選び、符号で答えなさい。

A　機能素への変換　　B　生産力への同化　　C　使用価値の形成

D　機能素の実体化　　E　生産力の対象化　　F　交換価値の形成

〔問八〕 次の文ア～オのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　貴族階級が支配していた時代には、職人の手によって生産された工芸品の意匠が流行になることがよくあった。

イ　十八世紀末からは、ブルジョワジーが社会を支配するようになるとともに、彼らは消費階層としても現れてきた。

ウ　十九世紀前半のヨーロッパでは、インダストリアル・デザインの協会が結成され、近代デザインの思想が確立した。

エ　パクストンによって、近代社会という新しい時代の意味に対する自覚的認識が装飾法を通して視覚化されはじめた。

オ　サリヴァンのアフォリズムは、形態からではなく機能から生物を分類する生物学の考え方を言い表したものである。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（20点）

義侠（ぎきょう）とは、〈自己の内にあるはげしい愛着や欲求を、他者ないし集団への忠誠のために、自らすすんで断念すること〉というふうに、ここでは定義しておこう。この定義は義侠のもつ消極的な側面のみを強調していると批判されるかもしれない。たしかに義侠は形としては、他者ないし集団への忠誠をえらぶ生き方、行動として表現されるのであって、内なる愛着の断念はその消極的な前提にすぎないともいえる。しかしたとえば、流行歌に歌いこまれるさまざまな〈義侠〉のかたちへの、民衆の心情的な共鳴の核は、結果としての行為の方向性よりむしろ、前提としての愛着の断念にあるように思われる。「なにわぶし」から新派悲劇、新国劇等々にいたる大衆芸術の、「やま場」とか「泣きどころ」の所在についても、同様のことがいえるのではないだろうか。主人公のえらんだ行動よりむしろ、そのためにふりすてられた愛着や、それをふりきった主人公の心根の方に、民衆の深い心情は共鳴するのではないだろうか。義侠を表現する動詞は、［(1)］とか「殉ずる」などよりむしろ、［(2)］「すてる」ということばであろう。義侠の心情の核心は、「主体的な」断念にある。

なにわぶしや「新派」の人気が、自己犠牲を強いられてきた民衆の共感によって支えられてきたという従来の説は、なにわぶしや新派を支持する民衆の意識にかんする本質的な点にふれてはいると思うが、それらにたいする民衆の積極的な感応のはげしさを充分には説明しえない。

義侠の行為を方向づける価値の基準は、超越神への信仰のごとき、この世界を超越する観念への忠誠ではなく、この世界に内在する個人や集団に向けられた忠誠であるが、さらにそれは、平和とか自由のごとき普遍的（universal）な原則への忠誠でなく、自分とある個別の関係をむすんだ具体的な個人や集団に向けられた、個別的（particular）な忠誠である。けれども同時に、それは自分の欲求や愛着の充足としての〈幸福〉を断念するところにある以上、――それはしばしば、自己の人生の絶対的な否定としての〈死〉をも辞さない！――それはいわば、人生を超越する価値に殉ずるものである。すなわち、義侠の価値意識は、人生超越的であり、世界内在的である。

人間の歴史の中には、多くの民衆が客観的にか、主観的にか人生の幸福を享受している時代もあった。しかし一方、多くの民衆が客観的にも主観的にも、人間的な幸福追求の可能性をうばわれたまま、意識の底にうっせきする恨みをのんで、一人一人の一度しかない人生を終えていく時代もあった。このような時代の中には、その状況を客観的に打破することが可能であるという考え方が、民衆のあいだに広く抱かれている時期もあった。しかしこのような時期は、歴史のいくつかの結節点の前夜にみられる例外的な時期にすぎない。多くのばあい民衆の主観にとって、時代の状況とその中での彼の人生の基礎的な構造はほとんど「運命」なのであり、彼の努力はその運命の内部でのいくつかの選択肢をえらぶ程のものなのであった。とすれば、彼らがその「運命」に耐える唯一の道は、[3]不幸な運命そのものを何らかの形において主観的に価値づけし、不幸に意味を付与することでなければならない。そのようにして要請された価値の基準は、当然、人生超越的なものでなければならない。なぜならば、人生内在的な究極価値は幸福であるが、ここに要請されているのは、まさに、幸福価値を超越することをつうじて、不幸そのものを意味づけする価値の基準であるからである。

いくつかの民族はそれを、世界超越的な価値の基準を内面化する信仰の中に見出した。しかしこのような、現世をまったく超越する思考の伝統をほとんどもたない日本の民衆にとって、超越神の信仰による主観的救済の完成はむしろ、「肌に合わない」ものである。と、すれば、その主観的救済にとって必要なものは、人生超越的でありながらしかも世界内在的な価値の基準でなければならない。そのような価値の基準こそ、個人の幸福を超越した集団の規範（オキテ、義理）であり、あるいは他方では〈美〉であった。そしてこの両者をさらに統合するのが義侠あるいは仁侠とよばれる倫理美の世界であった。いいかえれば「義侠」あるいは「仁侠」こそは、日本の抑圧された民衆にとって、最も完全な自己救済の様式の一つであった。それをとおして、運命としての非条理や自己犠牲はそれ自体として価値づけされ、幸いうすき人生も意味の彩りを帯びるのである。そして民衆はこの確認の儀式のまえに、ふかぶかと「うなずく」のである。[4]義侠は日本の民衆にとって、信仰の機能的等価としての意味をもっていた。

（見田宗介『近代日本の心情の歴史』による）

〔問一〕 空欄(1)と(2)に入る語の組み合わせとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A (1)「つくす」 (2)「ふりきる」
B (1)「えらぶ」 (2)「たちきる」
C (1)「懸ける」 (2)「思いきる」
D (1)「ちかう」 (2)「捧げる」
E (1)「果たす」 (2)「耐える」

〔問二〕 傍線(3)「不幸な運命そのものを何らかの形において主観的に価値づけし、不幸に意味を付与する」とあるが、その結果を示している箇所を本文中から十五字以上二十字以内で抜き出し、その最初と最後の五文字を答えなさい。(句読点、かっこも一字と数える)

〔問三〕 傍線(4)「義侠は日本の民衆にとって、信仰の機能的等価としての意味をもっていた。」とあるが、義侠は信仰とどのような点で等価なのか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 人生を超越する自己犠牲の美しさを持つという点
B 非条理を超越して自分と他人とを救済するという点
C 不幸を主観的に超越して自己救済をはかるという点
D 個人の幸福を超越した規範と美しさを持つという点
E 人生超越的で世界に内在する価値を生み出すという点

〔問四〕 次の文ア～エのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　民衆が義侠を好むのは、他人や集団のために行動する積極的な意志の強さと、自分の幸福を捨てるつらさに共感するからである。

イ　義侠を好む日本人は、人生を超越しながら世界に内在するものの価値は信じるが、世界を超越したものの価値は信じない傾向がある。

ウ　義侠は、不幸な運命の下に置かれた民衆が、自分の幸福の実現を断念して他人や団体に殉ずることで、自分を救済する行動様式である。

エ　義侠は、世界を超越した自由や平和という価値を守ろうとするというより、世界に内在している個人や集団の価値を守ろうとする倫理である。

三　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（30点）

これも今は昔、伏見修理大夫は宇治殿の御子にておはす。あまり公達おほくおはしければ、やうを変へて、橘俊遠といふ人の子になし申して、蔵人になして、十五にて尾張守になし給ひてけり。それに、尾張に下りて国行ひけるに、そのころ熱田の神、いちはやくおはしまして、おのづから笠をも脱がず、馬の鼻を向け、無礼をいたす者を、やがてたちどころに罰せさせおはしましければ、大宮司の威勢、国司にもまさりて、国の者どもおぢ恐れたりけり。それに、この国司下りて、国の沙汰どもあるに、大宮司、われはと思ひてゐたるを、国司とがめて、「いかに大宮司ならんからに、国にはらまれては、見参にも参らぬぞ」といふに、「さきざきさる事なし」とてゐたりければ、国司むつかりて、「国司も国司にこそよれ。我らにあひてかうはいふぞ」とて、いやみ思ひて、「しらん所ども点ぜよ」などいふ時に、人ありて大宮司にいふ。「まことにも、国司と申すに、かかる人おはす。見参に参らせ給へ」といひければ「さらば」といひて、衣冠に衣出だして、供の者ども三十人ばかり具して、国司のがり向ひぬ。国司出であひて対面して、人どもをよびて、「きやつ、たしかに召し籠めて勘当せよ。神宮といはんからに、国中にはらまれて、いかに奇怪をばいたす」とて、召したてて、結ふほどに籠めて勘当す。その時大宮司、「心うき事に候ふ。御神はおはしまさぬか。下臈の無礼をいたすだに、たちどころに罰せさせおはしますに、大宮司をかくせさせて御覧ずるは」と泣く泣くくどきて、まどろみたる夢に、熱田の仰せらるるやう、この事におきては、わが力及ばぬなり。そのゆゑは僧ありき。法華経を千部よみて、我に法楽せんとせしに、百余部は読みたてまつりたりき。国のものども貴がりて、この僧に帰依しあひたりしを、なんぢむつかしがりて、その僧を追ひ払ひてき。それに、この僧悪心をおこして、われこの国の守となりて、この答をせんとて、生まれきて、今国司になりてければ、わが力及ばず、その先生の僧を俊綱といひしに、この国司も俊綱といふなりと夢に仰せありけり。人の悪心はよしなき事なりと。

（『宇治拾遺物語』による）

注　伏見修理大夫……藤原俊綱。藤原頼通の子。　おのづから笠をも脱がず、馬の鼻を向け……たまたま笠も脱がず下馬もせずに通過すること。　点ぜよ……点検せよ。　勘当……処罰。

〔問一〕　傍線(1)「国行ひける」、(2)「いちはやくおはしまして」、(7)「むつかしがりて」の口語訳として、もっとも適当なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(1)「国行ひける」

A　国が実行した
B　国政を執行した
C　国で修行した
D　国内を巡行した

(2)「いちはやくおはしまして」

A　すばやくていらっしゃって
B　古くから鎮座していらっしゃって
C　一番さきにおいでになって
D　霊験あらたかでいらっしゃって

(7)「むつかしがりて」

A　不愉快に思って
B　困難に感じて
C　理解できなくて
D　無理を通して

〔問二〕 傍線(3)「いかに大宮司ならんからに、国にはらまれては、見参にも参らぬぞ」の解釈としてもっとも適当なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

A 大宮司だとはいっても、この国に生まれた者として、面会に参上はしないはずだ。

B 大宮司なのだから、たとえこの国に生まれた者であっても、面会には参上しないはずだ。

C 大宮司だとはいっても、この国に生まれた者であるからには、面会に参上しないことがあろうか。

D 大宮司なのだから、たとえこの国に生まれた者であっても、面会に参上はできないだろう。

E 大宮司だとはいっても、この国に生まれた者であるからは、面会に参上するはずがない。

〔問三〕 傍線(4)「かうはいふぞ」とは、具体的に何を指しているか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 熱田の神が国中で一番尊いのだということ。

B 人々が無礼をすると即座に罰を受けるということ。

C 前例がないとして国司が参上しないということ。

D 国中の人びとがおそれているということ。

E 大宮司が威勢をかさにきているということ。

〔問四〕 傍線(5)「熱田の仰せらるるやう」の範囲はどこまでか。最後の五文字を本文中からぬき出して答えなさい。(句読点は数えない)

〔問五〕 傍線(6)「わが力及ばぬなり」の理由の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 人々に信頼された法師を信用できない大宮司が、自ら国司となって追放してしまったから。

B 人々に信頼されていた法師が大宮司に追放され、国司に生まれ変わって仕返しをしにきたから。

C 法華経を読むことで人々に信頼されていた法師を、事情を知らない国司が追放してしまったから。

D 熱田大明神を祭って人々に信頼されていた大宮司を、事情を知らない国司が罰してしまったから。

E 人々に信頼されていた法師を追放した大宮司が、今度は熱田大明神から追放されてしまったから。